前橋市役所
文化国際課
ジャクソン・バニスター

第六号　令和八年二月

MAEBASHI FOCUS

国際交流員（CIR）ニュースレター

みなさん、こんにちは！みなさんが素敵な１月を過ごせたことを願っています。最近、約半年ぶりに地元へ帰省する機会があり、そこで改めてアメリカ南東テキサスでの生活が、いかに日本や他の地域と違うものかを実感しました。久しぶりに戻ってみると、子どもの頃は当たり前だと思っていた日常が、とても「テキサスらしい」ものに感じられたのです。今月は、そんな地元の雰囲気を少しでも感じてもらえるよう、テキサスでの典型的な週末の過ごし方をご紹介したいと思います。

土曜日の朝はだいたい朝7時ごろから始まります。家の中は静かで、冬でも空気は湿っぽいです。朝食の定番は一日を乗り切れるようなボリュームのある卵とベーコン、グリッツにトースト、あるいは私が昔から大好きな「ビスケット＆グレイビー」も外せません。

もし誰も料理をする気分でなければ、地元のドーナツショップへ向かいます。テキサスのドーナツ店は、日の出前から営業しています。そこに必ず並んでいるのが、チェコ系移民によって持ち込まれたテキサス名物「コラッチ」です。もともとは甘い菓子パンでしたが、テキサス流に進化し、今では食事向きの具だくさんなものが主流です。お気に入りはソーセージ・卵・ハラペーニョ入りですが、ハム＆チーズや、他ではなかなか見かけないスパイシーな種類まで、選択肢は豊富です。また、卵、肉、チーズ、ポテト、豆、ピーマン、サルサを詰め込んだブレックファーストブリトーも定番で、長い一日に備えるにはぴったりです。

9時ごろになると、友人たちや家族と車に乗り込み、インターステート10号線（I-10）に乗ってヒューストンのダウンタウンへ向かうことが多いです。南東テキサスでは車移動が生活の一部で、たとえ短い距離でも、ドライブそのものが目的の一つになります。道中には立ち寄りスポットが数えきれないほどあります。巨大なワニを間近で見られる「ゲーター・カントリー」、ヒューストンという街とテキサスの歴史を語るうえで欠かせない人物を称える「サム・ヒューストン記念碑」、NASAのジョンソン宇宙センター、歴史ある戦艦USSテキサス、そして湾を望むレストランが並ぶケマ・ボードウォークなど、選択肢は本当に多種多彩です。

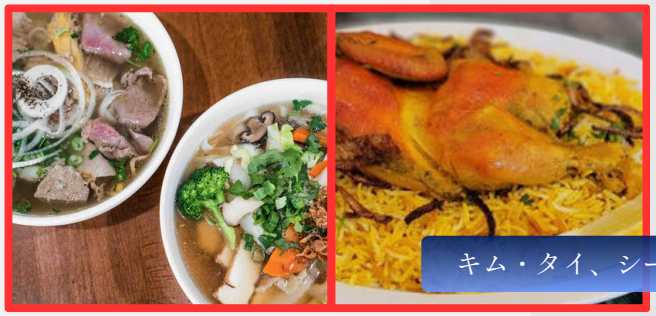
そしてもちろん、I-10沿いのドライブで欠かせないのが「バッキーズ」です。ここは単なるガソリンスタンドではなく、テキサスの“文化”とも言える存在です。驚くほど清潔なトイレ、巨大な売り場、そして意外なほどおいしい料理を求めて、人々はわざわざ立ち寄ります。お菓子や飲み物を手に取り、ついでにブリスケットサンドイッチ（私の好物です）を買ってから、再び車に戻る――そんな流れも、お決まりの習慣です。

ヒューストンの中心部に近づくにつれ、徐々にスカイラインが見えてきて、見慣れたランドマークが姿を現します。ヒューストン・アストロズの本拠地であるミニッツメイド・パーク、ひときわ高くそびえるJPモルガン・チェースタワー、そして現在はアート展示の場として使われている巨大な地下空間、バッファロー・バイユー・システム。街に到着すると、迷ってしまうほどの選択肢があります。

ジョンソン宇宙センター

ゲーター・カントリー

午後は、ヒューストン美術館やヒューストン自然科学博物館で過ごすこともあります。どちらも私自身、何度も訪れている場所ですが、行くたびに必ず新しい発見があります。そのほかにも、水族館やヒューストン動物園、かつての郵便局を修復し、フードスタンドやアート展示、そして街を一望できる屋上スペースが集まった「POSTヒューストン」など、選択肢は尽きません。買い物が好きな人なら、地域最大級のショッピングモールであるギャレリアへ向かうのもいいですし、ゆったり過ごしたい人はハーマン・パークでくつろいだり、歴史的建造物と現代的な高層ビルが並ぶサム・ヒューストン・パークを散策するのもおすすめです。


キム・タイ、シーバ

一日たっぷり遊んだあとは、再び「食」が主役になります。ヒューストンはさまざまなことで知られていますが、なかでも食文化の豊かさは群を抜いています。驚くほど多様な人々が暮らす街だからこそ、世界中の料理を楽しむことができ、ニューヨークのような大都市に引けを取りません。キム・タイの食欲をそそるベトナム料理から、シーバのイエメン料理まで、本当に誰もが楽しめる選択肢があります。昔からのお気に入りに行くにしても、新しい店に挑戦するにしても、夕食はにぎやかで、笑い声の絶えない、長い会話とともに過ごす時間になります。

夜7時ごろになると、満ち足りた疲れを感じながら、家路につきます。平らなテキサスの大地にピンク色の夕焼けが溶けていくのを眺めながら、その日の出来事を振り返り、次は何をしようか、すでに次回の話を始めているのです。